





図1 蝶と黄色い帽子の少年 1971年

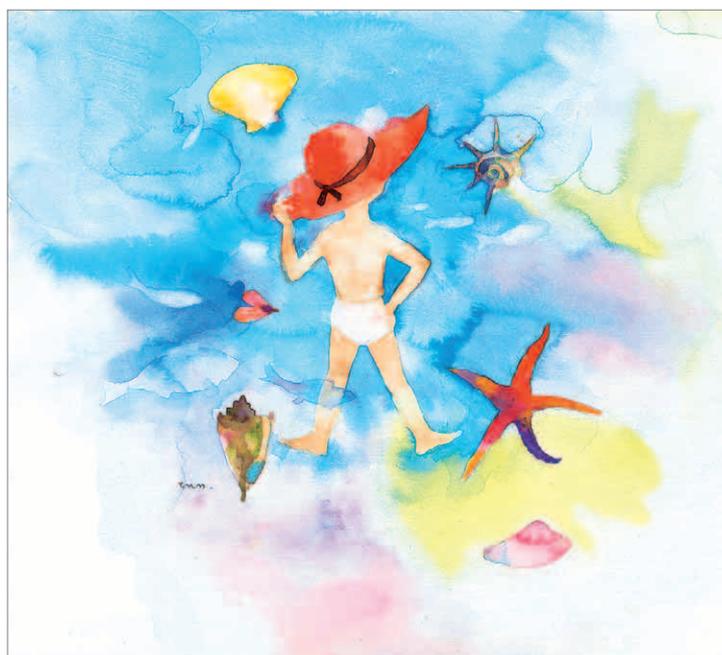


図2 貝と赤い帽子の少年 1970年



図3 月を見る少年 1970年



図4 夏の草むら 1973年



図5 黄色い傘の少女 1969年



図6 お姉さんとあかちゃん 1971年



図7 あごに手をおく少女 1970年



図8 「雪のなかで」 1972年



図9 ききょうと子どもたち 1967年



図10 長男・猛 1951年



図1 エリック・カール (アメリカ)
くじゃく 1991年



図2 クラウディア・レニャツィ (アルゼンチン)
『わたしの家』より 2001年



図5 ロバート・クアッケンブッシュ (アメリカ)
『すずの兵隊』より 1964年



*卵テンペラ：卵と顔料を練り合わせてつくる絵の具や、その絵の具を使って描く古典技法。

図3 ピンバ・ランドマン (イタリア)
『ジョットという名の少年 羊がかなえてくれた夢』より 2002-2003年



図4 アンドレア・ベトルリク・フセイノヴィッチ (クロアチア)
『不思議の国のアリス』より 2002年

色の音 紙の詩 クヴィエタ・パツォウスカー展

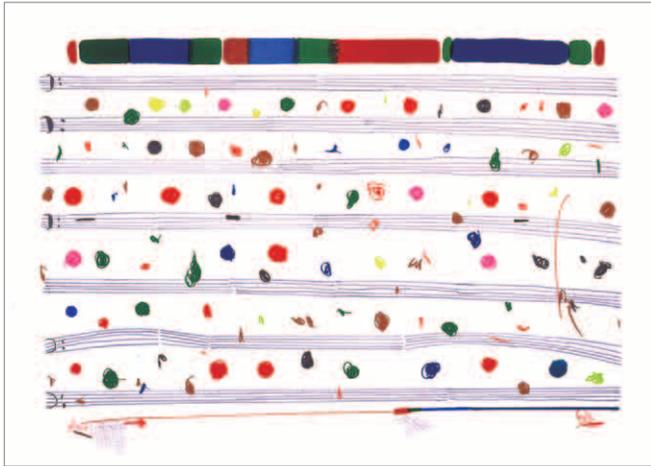


図1 七色のオペラ 1989年



図2 チェックサイ 1999年



図3 水玉サイ 1999年

図2、図3 Květa Pacovská: Rotrothorn
©1999 by Ravensburger Buchverlag Otto Maier GmbH, Ravensburg (Germany)



図4 黄色い色鉛筆のある像 1988年

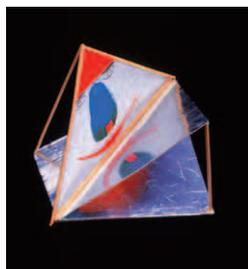


図5 ピラミッドの道化師 1994年



図6 まわるおしゃべり 1995年
「ちひろ美術館コレクション 世界の絵本をめぐる旅展」(島根県立石見美術館 2011年) 展示風景より



クヴィエタ・パツォウスカー
Květa Pacovská
(1928~)

ブラハに生まれる。父はオペラ歌手、母は外国語教師。本と絵と音楽に囲まれて子ども時代を過ごす。ナチスの台頭によりユダヤ人の父が殺され、13歳から4年間は学校に通えなかった。戦後ブラハ美術学校で、エミール・フィラの元で応用美術を学ぶ。鋭敏な色感と自由な発想で、絵本のほか、グラフィックや立体作品の制作も多い。1992年国際アンデルセン賞画家賞など国際的な賞の受賞多数。ブラハ在住。



図7 Couleurs du Jour 『日々色』より 2010年 (Editions des Grandes Personnes)

ちひろになれる！7つの法則 -技法徹底解剖-

●2013年7月12日(金)～9月17日(火)

やわらかな色彩と確かなデッサン力、子どもをテーマに描き続けたいわさきちひろ。その絵は、なにげなく描かれているように見えて、実は、さまざまな技法や工夫が隠されています。本展では、ちひろの代表的な技法を7つの視点から徹底解剖し、その絵の魅力を探ります。

法則その1ー水を使いこなす

透明水彩絵の具には“水に溶ける”という特性があります。ちひろは、水の量や塗り方を工夫することで、この特性を巧みに自らの表現へと取り込みました。

後期の水彩画の最も魅力的な表現の一つである「にじみ」。筆にたっぷり水を含ませて描くと、水とともに絵の具が広がり、微妙な濃淡が現れます。その絵の具が乾く前に別の色を差すと、色が混ざり合い、複雑な色調が生まれます。「貝と赤い帽子の少年」(図2)の背景には、青や黄色、紫など、さまざまな色のにじみにより、浜辺にも、海のなかにも感じられる幻想的な風景が描き出されています。



海と二人の子ども『ぼちのきたうみ』より 1973年
水の量を駆使して打ち寄せる波も描いています

法則その2ー構図の工夫「大きさを変える」

日本画には、手前に物を大きく配置し、奥に描かれたものをのぞき見る構図が多く見られます。ちひろは、この構図を好んで用いるとともに、物の大きさを自由に換え、装飾的に配置して描きました。

「ききょうと子どもたち」(図9)では、子どもたちのまわりを、大きなききょうの花が取り囲んでいきます。現実の見え方にとらわれず、大胆な発想で描くことも、ちひろの特徴的な技法の一つといえます。



十五夜の子どもたち 1965年
画面の手前にさまざまな秋草が描かれています

法則その3ーかわいさのひみつ

やわらかな髪、黒目がちの瞳、ぼちゃぼちゃした手……。自らも息子を持つ一人

の母親だったちひろは、小さな命を慈しむように、子どもたちの仕草や表情を描きました。そこには、ちひろならではの子どものバランスや特徴が見られます。

「お姉さんとあかちゃん」(図6)の二人は、幼い子どもに共通する顔の特徴が強調して描かれています。つぶらな瞳、小さな鼻、丸い顔……。そして、両目とあごの先を結ぶと正三角形になるように配置されたバランス。これは誰もがかわいと感じる黄金比率かもしれません。繰り返し描き、「子ども」のイメージを追求するなかで、ちひろは独自の子どもの顔のバランスを確立させていきました。



ざるそばと少女 1970年頃
手の表情も子どものかわいさのポイントです

法則その4ー色でもひと工夫

色には、色と色との組み合わせにより、見え方が変わるという特徴があります。

ちひろの絵の配色に着目すると、補色*を効果的に用いた作品が多く見られます。

「黄色い傘の少女」(図5)に使われている、傘の黄色と長靴の紫も補色の関係にある色の一つです。長靴を手で隠すと、少しもの足りない印象になるでしょう。限られた色数でも、画面全体の色のバランスと見え方を考え、ワンポイントの差し色を効果的に登場させています。

*補色-互いに引き立て合う2色の色同士のこと

法則その5ー「引き算」で描く

1970年頃から、ちひろは世阿弥の能芸論書である『風姿花伝』を愛読し、とくに「秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず」という部分に共感していました。抑制された演技のほうが、より深い感銘を与えることと解釈したちひろは、説明的な要素をできるだけ省略する表現を目指しました。ちひろはこの考え方を「引き算」と呼んでいました。

「あごに手をおく少女」(図7)は、少女の顔と手が極限まで簡略化された作品です。白地のなかに、顔と髪、手の一部のみが描かれ、眉毛も顔の輪郭も、手の甲の線も描かれていません。引き算で描いたこの作品には、見るものの想像や記

憶を重ねる余地が残されています。



小犬を抱く少女『ぼちのきたうみ』より 1972年
後姿で描くことも、見るものの想像を刺激します

法則その6ー鉛筆を使いこなす

「雪のなかで」(図8)は、ちひろの線の魅力が凝縮された作品です。子どもの横顔は、鉛筆を立てたシャープな線で、フードは、鉛筆を寝かせた太くやわらかなタッチの線を使って描かれています。

第二次世界大戦後、画家を目指して上京したちひろは、当時、師事していた丸木俊(当時は赤松俊子)から、自分が引く一本の線にも責任を持つという考え方を学びました。その後も、数多くのデッサンやスケッチを描き続け、線の表現を追求したことが、巧みな線描を生み出す礎となったのでしょう。後期の作品には、筆勢や筆圧、鉛筆の角度を自由自在に駆使した、表情豊かな線が登場しています。

法則その7ー愛するものをモチーフに

ちひろの絵の魅力は、卓越した技法であるとともに、そこに込められた母としての限りない愛情にあるといえます。

ちひろは32歳のときに、一人息子(図10)をもうけました。その喜びを、「うしおのように流れだす愛情を、どうしようもなく」と振り返っています。

母性の画家とも呼ばれるちひろは、生涯「子ども」をテーマとして描き続けました。晩年には、「世界中のこどもみんなに平和としあわせを」という言葉を残しています。ちひろが描いたすべての作品には、戦争体験を経て強く願った平和への思いと、世界中の子どもたちに向けた母としての愛情が込められています。



立てひざをつけてポーズをとる猛 1954年(左)
立てひざの少年 1970年(右)

後年、幼い頃の息子の写真をもとに描いた作品です

7つの法則から、ちひろの作品の根底にある巧みな技法の数々を再発見していただければ幸いです。(宍倉恵美子)

色の音 紙の詩 クヴィエタ・パツオウスカー展

●2013年7月12日(金)～9月17日(火)

後援 一般社団法人日本国際児童図書評議会 (JBBY)、チェコ共和国大使館、CZECH CENTRE TOKYO、絵本学会

安曇野ちひろ美術館における2001年の展覧会以来、日本で12年ぶりのクヴィエタ・パツオウスカー展となる本企画展では、新たに80点もの作品を画家自身から借用し、展示します。

パツオウスカーは、個展や本のイラストレーションを1960年代から始め、1980年代からは国内のみならず、海外でも注目されるようになりました。1990年代からは海外の出版社からの出版が中心となり、展示は母国チェコのみならず、ドイツ、フランス、イタリア、メキシコ、台湾、韓国と、世界各地で行われてきました。

絵本、グラフィック作品、立体作品など、扱うジャンルも幅広い彼女にとって、本は制作の初期から現在に至るまで常に新しい表現を探しながら継続してつくり続けているものです。「絵本は子どもにとっての最初の美術館」と語り、美しく楽しく工夫をこらしながら本の可能性を毎回広げているパツオウスカーは、国を超えて多くの読者の手元へ届く、「小さな美術館」を大切にしています。

本展では、85歳となる今もなお、創作を続ける彼女が描いた、1985年の『すずの兵隊』から、2010年の*Couleurs du Jour*まで、9冊の絵本の原画を中心に、紙の彫刻とともに紹介します。



プラハのアトリエの中のパツオウスカー。白い壁に囲まれて、大小の立体作品、絵画などが並ぶ。

色の音

パツオウスカーの絵や絵本を一度見た人は、そこにあふれる鮮やかな色と色の組み合わせを記憶することでしょう。「色、それは、音楽のようなもの。ひとつずつでもすばらしいけれど、決められたつながりでもすばらしい。」と本人は語っています。このように色と音楽を重ねて表現した画家は少なくなく、例えばカンディンスキーは絵画がめざすべき姿を音楽に仮託したり、色彩を音響とのアナロジーにおいて語ったことで知られています。

赤、黒、緑などの色を組み合わせることにより、パツオウスカーは独自の音楽を生み出しています。

「七色のオペラ」は、絵本のための作品ではなく連作の一つですが、大きな楽譜を思わせる、うすく五線がプリントされた画面いっぱい、赤、黄色、青、ピンクと、7、8色の丸やうずまき、点や線が散りばめられています(図1)。普通の楽譜のように黒い音符が行儀よく五線の決まった場所に並ぶのではなく、自由に五線の間を色が飛びはね、まるで子どもたちが楽しく遊びまわっているようにも見えます。「色が集まってグループになると、新しい広がりをつくり、和音をつくり、不協和音をつくり、交響曲をつくり、オペラをつくり、そして子どものための本をつくります。」というパツオウスカーの文章には、彼女の絵本づくりの真髓がこめられています。

紙のおしゃべり

パツオウスカーの作品は、平面にとどまりません。「本は私にとっては建築。閉じられた空間に、描いたり、書いたり、そして何も無いページを作ったりするのです。」と語っています。

1990年に出版された『ふしぎなかず』(ほるぶ出版、絶版)は、一般読者が手に取れる、パツオウスカー初めてのしかけ絵本で、1から10までの数字を動物や道化師が絵と図形で語ります。穴から次のページの絵が見えたり、小さな扉を開くことができたり、銀色の紙が鏡のように貼ってあったり、とページごとにたくさんの遊びが含まれています。以後、彼女のつくる本の多くには、2次元の紙を3次元にする工夫が現れます。

こうした発想は本にとどまらず、彼女が彫刻と呼ぶ、小さな立体作品にまで及びます。「黄色い色鉛筆のある像」(図4)は、白い厚紙に彩色がほどこされたものですが、短い黄色い色鉛筆が、ユーモアと緊張感を生み出しています。これらの小さな紙の彫刻や作品からストーリーをつかったのが、ちひろ美術館コレクション絵本『紙の町のおはなし』(小学館2000年)です。紙の町のなかで、主人公の女の子がさまざまなおもしろい形をした住民(紙の彫刻)に出会う、という設定は、紙を含めるあらゆるものにいのちを見出すパツオウスカー独自のアニミズムを感じさせます。



『あかあかサイ』 *Rotrothorn*

絵本*Rotrothorn*(未邦訳、Ravensburg 1999年)は、日曜日から土曜日まで、語り手の「お絵描きこびと」がつくったり描いたりしたさまざまな色や柄のサイが登場する本です。紙と絵の具で新たなサイを描いては友だちになっていく、ほとんど姿を見せない語り手のこびとと作者がどこか重なります。

「チェックサイ」(図2)には、パツオウスカーがよく用いる赤も含まれていますが、同じ赤色でも画材や描き方が異なります。チェックの四角も決して滑らかにつながっておらず、少しずれたり、色がはみ出しているようすが、感覚的です。「水玉サイ」(図3)は、明るい黄色の地に赤と緑と黒の円が所狭しと塗ったり貼ったりされており、どこか子どものいたずら描きを彷彿とさせます。絵本の最後には読者にも自分のサイを描いたりつくったりすることを薦めており、創作の喜びが詰まった本です。

『日々の色』 *Couleurs du Jour*

2010年にフランスで出版された、アートブックともいえる『日々の色』*Couleurs du Jour* (Editions des Grandes Personnes 2010年)は大きさが13 $\frac{1}{2}$ 四方、厚さは6 $\frac{1}{2}$ と小ぶりですが、開くと全長10メートルの絵本。168ページもの絵がつながります。

「私は、色をそのトーンや、それぞれがもつ音によって選びました。月曜日は緑、火曜日は青、水曜日はオレンジ、木曜日はピンク、金曜日はシナモン色、土曜日は茶色、そして日曜日は黄色い耳もっている。これが、私が10歳だったころ想像していた、日々の色です。そのとき他の人は誰も曜日の色を知らないのに、驚きました。」と彼女は前書きに書いています。ページをめくると、図形や不思議な生き物、色が現れては次へとつながっていきます。三角にくりぬかれたページ、うずまきのあるページ、切り込みのあるページ。本に言葉らしい言葉はなく、どこが始まりで、どこが終わりかもはっきりとしません。読者は一度ではなく、何度も繰り返し手にとって、ページを行ったり来たりしながら、時と色と空間の世界に入り込んでいきます。パツオウスカーの本と作品のもつ遊びや感覚性は、バーチャルリアリティーがあふれる現代が失いつつあるものを教えてくれるようです。(本展は2014年春にちひろ美術館・東京に巡回する予定)。(松方路子)

ちひろ美術館コレクション 貼る・塗る・摺る - 絵本画家たちの技法と画材 -

●2013年7月12日(金)~9月17日(火)

絵本画家は、物語や伝えたいことを表現するため、さまざまな画材や素材を用い、描き方にも工夫をこらして絵本を制作しています。本展では、“技法”や“画材”に焦点をあて、「貼る」「塗る」「摺る」の3つのテーマから作品を紹介します。

貼る

紙や布、立体物など、多様な素材を組み合わせ、画面に貼り付ける技法を“コラージュ”といいます。

エリック・カール(図1)は、筆やスプレーなどで彩色した薄紙をカッターで切って、貼ることで、鮮やかな色彩と表情豊かな線をつくります。クラウディア・レニャツィの『わたしの家』(図2)には、豆やパスタ、葉など身近な素材が貼られ、発見の楽しさを味わえるとともに画

家のアイデンティティが感じられます。

塗る

彩色するための数多くの画材のなかから、画家たちは、表現したい世界を描くために最適なものを選びます。

ビンバ・ランドマンは、羊飼いの少年ジヨットが“イタリアルネサンスの出发点”と呼ばれる画家になるまでの物語を祭壇画風の板絵(図3)にするにあたり、ジヨットが生きた13世紀にも使われていた技法、卵テンペラ*を用いています。透感のある鮮やかな色彩が印象的です。アンドレア・フセイノヴィッチの『不思議の国のアリス』にはアクリル絵の具が使用されています。水に溶け、乾燥後には耐水性になるアクリル絵の具は、使い方が多いので多彩な表現が可能です。この

絵では厚塗りすることで、油彩画のような艶と質感を生み出しています(図4)。

摺る

一口に版画といっても、銅版や木版、石版、シルクスクリーンなど、版の素材や仕組みにより、描線や色面の質感が異なり、それぞれの味わいがあります。

木版画の技法による、ロバート・クアックンブッシュの『すずの兵隊』(図5)は、板を削り取ることで生まれる大胆で力強い線と、木目や刷りの力加減による素材であたたかみのある質感が魅力です。

画家たちが選ぶ“画材”と“技法”は、生まれ育った国の文化や伝統とともに、それぞれの画風をかたちづくる大切な要素です。画家たちの個性あふれる表現をお楽しみください。(水谷麻意子)

〈3/31(日)・4/14(日)イベント報告〉「手から手へ展 - 絵本作家から子どもたちへ 3.11後のメッセージ -」

絵本作家の降矢奈々さんが、子どもの本に関わる世界中の仲間たちに呼びかけて広がった、手から手へ展。会期中、出版作家を講師に迎え、手をテーマにした2つのワークショップを開催しました。

まずは3/31に開催した「きてきての木」。タイトルには、多くの人に展示に足を運んでほしい、「来て来てね」という思いが込められています。講師は早川純子、坂田季代子、山福朱実の3氏。“きてきての木”に住む生き物を想像し、自分や家族の手型を使って、ふしぎな生き物をつくりました。完成した生き物同士でお話ししたり、大きく映し出して即興の物語が生まれたり、その日出会った参加者の間に交流が生まれました。

4/14にはオランダの絵本作家、アレックス・デ・ウォルフを迎え、「HANDMADE(手で作る)」を開催。日本が好きで、震災後の日本の子どもたちの未来を案じ、手から手へ展に参加したアレックス氏。2012年にヨーロッパを巡回した本展の、オランダ展立ち上げに奔走された方でもあります。はじめに、オランダの国や風土、日本とのつながりについて紹介したあと、彼のつくった紙芝居を鑑賞。堤防の穴を指でふさいで村を水害から守ったというオランダの伝説的少年ハンス・プリンカーの物語は、自然災害と1人の少年の勇気ある行動という内容に、考えさせられるものがありました。最後に、ポップアップカードを制作。好きな動物を

スケッチし、その動物の手(足跡)も描きます。動物の絵が得意なアレックス氏に描き方のコツを習い、それぞれにアイデアいっぱいのカードが完成しました。



どちらのイベントも、作業を通して作家と触れ合い、会場にあふれる笑顔が印象的な2日間となりました。出版作家たちの思いが、1人1人の手から手へと、より深く伝わっていくのを実感しました。(入口あゆみ)

〈5/18(土)・5/19(日)イベント報告〉「絵本『ブルムカの日記』原画展」

本展にあわせて初来日したポーランドの絵本画家イヴォナ・フミエレフスカが、イベントを行いました。

ギャラリートークでは、フミエレフスカが絵本の一部を「コルチャック先生の母国語」であるポーランド語で読んだ後、制作背景について語りました。母国では児童文学者として名を知られるコルチャックですが、彼の語ったことを知る人は多くないとのこと。最初は、コルチャックと孤児院の子どもたちのゲッターにおける最後の日々をテーマにと考えたものの、それよりも彼が生涯をかけて守り、伝えたかった、子どもたちの権利の中心に絵本をつくることにしたといいます。絵本の最後の見開きには勿忘草が

貼られていますが、この花は、ポーランド語、ドイツ語、英語でも「私を忘れないで」という意味をもち、それがこの本が伝えたいことでもある、と語りました。フミエレフスカは、制作中は始終、誰かに守られているような気がした、と涙ぐみ、彼女のこの絵本への想いの深さを感じさせました。

ワークショップでは、『ブルムカの日記』を松川中学校の図書委員の生徒とフミエレフスカが交互に読んだ後、当時の孤児院のスライドを見ました。そして、この絵本に登場する子どもたちが持ちえなかったもので、何を自分ならあげたいかをコラージュで制作しました。12人の子どもたちの顔が描かれた紙を選んで切

り抜いた後、用意されたさまざまな模様の紙で服やものをコラージュで描いていきます。孤児院の子どもたちに犬をあげたいという人、幸せな将来をあげたいという人、着物をあげたいという人など、参加者の想像力あふれる作品を見た後フミエレフスカは、「この本に続編はないが、それは皆さんがそれぞれつくるので」と語りました。彼女の静かな語り口のなかに、絵本制作への真摯な気持ちを実感した2日間でした。(松方路子)



ちひろを 訪ねる旅⑤

北海道旅行と ジンギスカン鍋



5月3日 函館に程近い大沼国立公園
遊覧船にて、ちひろ、文江、猛



1960年夏ジンギスカン鍋を囲む

1957年5月2日から8日にかけて、いわさきちひろは、夫、善明と長男、猛、母の文江とともに、北海道旅行に出かけています。善明が北海道へ出張するのにあわせての旅行で、仕事を終えた善明も合流し、道内各所を回りました。行きは急行十和田で青森まで行き、青函連絡船大雪丸を乗り継いで函館まで。函館、大沼国立公園、洞爺湖、定山渓温泉、登別温泉を回り、帰路は千歳空港から飛行機という道程でした。写真には、春遅い各地を、お洒落なコートを着て旅を楽しむ家族の姿があります。

今年、ちひろたちが北海道旅行をしたのと同じ時期に、札幌ではいわさきちひろ展が開催され、そ

の機に松本家のホームパーティーの定番であった「ジンギスカン鍋」の秘密が少しわかりました。

名前を聞くとモンゴル料理のようなジンギスカン鍋。その源流は中国料理の烤羊肉（カオヤンロウ）。日本で定着した由来は諸説ありますが、明治時代から綿羊の飼育が盛んだった北海道は、いくつかある発祥の地の有力なひとつだといえます。鍋の形が独創的で、つばのある丸い帽子のような形の鉄鍋は、山の部分に溝が刻まれ油や肉汁が流れ落ちるように工夫されています。山の部分で肉を焼き、淵の部分にたっぷりともやしなどの野菜を敷いて、流れてくる肉汁とともに焼きます。松本家の鍋は、

下に炭を入れる器がついた本格的なものでした。ちひろ特製のタレは、おろしリンゴが隠し味。このおろしリンゴ入りのレシピこそ、北海道のものだとか。

この旅がきっかけであったかどうかは定かではありませんが、人を招いては、庭でもうとうと煙のたちこめるジンギスカン鍋を囲む習慣は、その頃から定着したようです。羊肉が手に入らないときは、豚肉でした。若き日の作家・早乙女勝元や児童文学者・鳥越信も招かれて楽しく鍋を囲んだ一員。豊かではなかった時代、将来を嘱望される若者たちを、よく招いていたという善明とちひろ。ふたりの思いが伺えます。（竹迫祐子）

ひとこと ふたこと みこと

4月1日（月）

今回で4回目です。松田道雄さんの『育児の百科』をいつも手元におき3人の子育てをしました。今回初めてその絵がちひろの作品と知りました。この本を読むと不安がすーっとなくなる思いでしたが、愛らしい表情やしぐさの子どもたちの絵に救われたのだと感じています。今1歳の孫がちひろの絵と重なります。どうしてこんなに愛に満ちた絵が描けるのでしょうか！ここに来ると本当に心がほっとします。

4月19日（金）

手から手へ展 感想ノートより
こんなに涙をがまんしながら歩いた美術館は初めてです。のどの奥がツーンとなって、言葉を出したら、崩れてしまいそうです。人間

が住みやすくなるための開発や工口はやめて、地球が、人が、動物が、仲良く暮らすことのできる日が来ればいいのに。人間が地球を汚して、壊しているという自覚を持って、生かされていることを感謝しないといけないとは思っても……何もできていない自分がいます。原発も戦争も、人間がやめればいいだけのことなのに。

5月5日（日）

16年前、開館もないGWに初めてここを訪れました。信濃松川駅から、まだ看板もなく、歩いて歩いて、この屋根が見えたときには本当にほっとし、うれしい瞬間でした。翌年、結婚を数カ月後に控えた今の主人と。ここを気に入ってくれるか心配でしたが、気持ちよさそうに外のベンチで昼寝して

いました。その後、長女を連れて3人で。次女を連れて4人で。何度も訪れ、今日は2度目の両親を連れての旅行です。ちひろの絵だけではなく、この建物、公園、山々、川のせせらぎ、すべてがほっとさせてくれます。私たち家族の「故郷」になっています。

5月6日（月）

広島から旅行で来た中学生です。小学生の頃、ちひろさんの本を読みました。私は、戦争のときに何があったか、どれだけたくさんの人が悲しんだか、実感はわかりません。だけど、とてもたくさんの命が、未来が、失われていったのはわかります。ちひろさんの本は、子どもである私に、たくさん考えさせてくれました。ありがとうございます。



美術館 日記

5月19日（日）☁

長野の自然を味わい、文化を学び、平和の大切さについて考える学習旅行で、韓国から中学生40名が来館。ギャラリートークを行い、子どものしあわせと平和を願ったちひろの思いや、作品の魅力を伝える。韓国の絵本画家キム・ドンソンの『かあさんまだかな』の原画の前では、絵の特徴や、描かれた日韓統治時代の町並みについて解説する。7月には、ソウルの高校生たちが来館、地元明科の高校生と一緒にちひろの水彩技法を体験。若い世代の交流が新しい時代の架け橋となることを期待する。

5月24日（金）☀

長野県公共図書館館長会議が、松川村で開催され、午後からは当館にて図書館と美術館の連携活動つ

いて、事例発表。教育普及の担当者が、中学生ボランティアの活動や絵本の読み聞かせ、サマースクールなど、村の公民館や図書館と協力して行っている活動を紹介した。これからも、積極的にさまざまな施設と協力して、地域の方々にとって魅力的で有意義な活動をしていきたい。

5月26日（日）☀



今年で2回目を迎える松川村の「5月の風音楽祭」。ちひろ公園では街角コンサートのひとつとして、アルプホルンの演奏と合唱が行われた。さわやかな晴天のもと、芝生の上でくつろぎながらす

がすがしい音色に耳を傾け楽しむお客様。演奏後、希望者はアルプホルンを実際に吹かせてもらい、大いに盛り上がった。

6月5日（水）☀

栄養補給のため、土を休ませていたちひろ公園の大きな花壇に、待望の花が広がる。中学生と村民ボランティアのみなさんによって、定植作業が行われた。生徒たちは、コツを教わりながら、ブルーサルビアの苗をひとつずつ丁寧に植えていく。遠く雪を残した北アルプスと新緑の山々を背景に、鮮やかなブルーが、ちひろ公園に新たな彩りを添えてくれた。



●次回展示予定 2013年9月20日(金)～11月30日(土)

〈展示室1・2〉ちひろのアトリエ -東京・黒姫-

1952年、東京・下石神井に構えた自宅内のアトリエで、ちひろは多くの作品を生み出しました。1966年には長野県北部の黒姫高原にアトリエを兼ねた山荘を建て、自然のなかでの制作も楽しんでいました。本展では、『戦火のなかの子どもたち』や『あかまんまとうげ』などの作品とともに、東京と信州・黒姫の復元アトリエを展示し、ちひろの制作の背景を伝えます。



アトリエの自画像「わたしのえほん」(新日本出版社)より1968年

〈展示室2〉ちひろの人生

〈展示室3・4〉ちひろ美術館コレクション

画家たちのアトリエ

作品が生まれる大切な場所“アトリエ”には画家の個性があふれています。本展では、アトリエという場所にスポットをあて、瀬川康男、エリック・カール(アメリカ)、パク・チョルミン(韓国)などの作品とともに、復元アトリエや写真を展示し、画家その人の魅力に迫ります。



瀬川康男『ぼうし』(福音館書店)より1983年

〈展示室5〉絵本の歴史

安曇野ちひろ美術館 イベント予定 各イベントの予約・お問い合わせは、安曇野ちひろ美術館へ。
詳細・最新情報はホームページからもご覧いただけます。http://www.chihiro.jp/ TEL.0261-62-0772 FAX 0261-62-0774

●夏休み体験コーナー

ちひろの水彩技法ワークショップ・パツオウスカー ワークショップ



海辺のひまわりと少女と小犬 1973年

12回目を迎える、夏休み恒例の体験コーナー。地元・松川中学生ボランティアが、サポート役となり、子どもから大人まで気軽に楽しめるワークショップです。今年も、開催中の展示に関連し、ちひろとパツオウスカーの2人の絵本画家の技法を体験します。

日程：7月27日(土)～8月17日(土)

ちひろ：10:00～16:00(最終受付15:30)参加自由。

パツオウスカー：定員制。当日会場にて要予約。

会場：安曇野ちひろ美術館 多目的ギャラリー
参加費：材料費100円(入館料別)



パツオウスカー探検ツアー

松川中学生ボランティアがツアーガイドとなって、開催中の「〈企画展〉色の音 紙の詩 クヴィエタ・パツオウスカー展」のみどころや作品の魅力を紹介いたします。
日時：7月27日(土)～8月17日(土) 13:00～13:30
会場：安曇野ちひろ公園～安曇野ちひろ美術館 展示室4
参加費：無料(入館料別) 定員：20名
申し込み：要予約(当日館内に受付)

松川中学図書委員による絵本の読み聞かせ

日時：8月2日(金)、8月4日(日)、8月7日(水)、8月9日(金)
第1部 14:00～14:30 第2部 15:00～15:30
会場：安曇野ちひろ美術館 絵本の部屋
参加費：無料(入館料別)
申し込み：不要(参加自由)

●館外展 岩手県立美術館「いわさきちひろ展」



「いわさきちひろ展」パンフレット

岩手県では17年ぶりの開催。ちひろの代表的な絵本作品に加え、画家としての歩みをはじめた時期の貴重なスケッチや初期の油彩画、またちひろの画業を支えた家族をテーマにした作品など134点を展示します。
会期：2013年7月25日(木)～8月25日(日)
会場：岩手県立美術館
お問い合わせは、岩手県立美術館
TEL. 019-658-1711まで。

●2014年ちひろカレンダー

子どもの幸せと平和を願いつづけた、ちひろの思いをつなげるカレンダー。大判カレンダーとポストカードカレンダーの2種類があります。7月25日(木)より発売。



●夕暮れミュージアム-夜の美術館を楽しもう-

共催：安曇野アートライン推進協議会、松川村観光協会
8月24日(土)は、21時まで開館時間を延長します。
浴衣でご来館の方には、1ドリンクをサービス。公園でのすすむし祭りや、「ちょっと怖い」絵本のおはなしの会などのイベントも。美術館までのアプローチには、地元の子どもたちが絵を描いた紙袋に廃油ろうそくをいれた「安曇野まほらランタン」を灯します。やさしい光でライトアップされた、夜の美術館をお楽しみください。



●おはなしの会

毎月第2・4土曜日
11:00～
参加自由、入館料のみ。

●ギャラリートーク

毎月第2・4土曜日
14:00～ちひろ展
14:30～世界の絵本画家展または企画展
参加自由、入館料のみ。

CONTENTS

〈展示紹介〉ちひろになれる！7つの法則ー技法徹底解剖ー…②④／〈企画展〉色の音 紙の詩 クヴィエタ・パツオウスカー展…③⑤／ちひろ美術館コレクション 貼る・塗る・摺るー絵本画家たちの技法と画材ー…③⑥
〈イベント報告〉3/31(日)・4/14(日)「手から手へ展ー絵本作家から子どもたちへ 3.11後のメッセージー」／5/18(土)・5/19(日)「絵本『ブルマカの日記』原画展…⑥／ちひろを訪ねる旅50／ひとことふたことみこと／美術館日記…⑦

美術館だより No.75 発行2013年7月12日

安曇野ちひろ美術館